金沢大学
50年史編纂
ニュース・レター
No.3
1997.6.24

“第１回教官OB懇談会”について

～全体史の編纂をめぐって～

３月２６日午後，５０年史編纂室において金沢大学名誉教授の先生方から，『金沢大学５０年史』の全体史の編集について貴重なご意見を伺いました。お集まりいただいたのは，亀山忠典先生（がん研究所），小西健二先生（理学部），多田治夫先生（教養部），関雅美先生（教養部），深井一郎先生（教育学部），山本譲先生（薬学部），寺田喜久雄先生（理学部），進藤牧郎先生（経済学部），鈴木寛先生（法学部）（順不同）の９名の先生方です。今回は，編纂室の谷本室員が全体史の構成試案（目次）を示して，先生方からご指摘いただいた点の要約をご紹介します。

◆金沢大学の前史について
金沢大学は，旧制の諸学校を統合して発足しました。したがって，様々な学風を有した者たちが集まった点が非常に重要といえます。特に，旧制高等学校の四高は，金沢市民からも親しまれたように，独特な文化を形成しています。四高で活発に展開された研究会やスポーツ活動などをみていくことは，地域との関わりをも歴史的に検証していくことにつながっていくものと思います。

◆教養部の独立について
教養部独立の問題は大変重要だといえます。教養課程は各学部につながっており，それを教養部として独立するよう文部省から要請がありました。独立の前に，全学の教養部制度調査委員会が設置され，教養教育に必要な分野と教官数の調整が検討されました。独立当時，教官数の増加もなく各学部から教官が来て担当する形で，少ない教官でスタートしました。似たような事例は，新制大学として発足した際にもあったのではないかと思います。

◆国際交流の歴史について
国際交流については，近年の問題としてのみ捉えるのではなく，海外文化交流委員会などの活動によって積極的に行われてきた歴史があります。ペンシルバニア大学と金沢大学との交流の契機は、金沢にあったアメリカ文化センターの提案が大きいと思います。CI&Eの関係文書をみれば、そのあたりの事情が分かるかもしれません。

◆大学紛争・大学自治の問題について
学生自治の問題として，学寮問題が挙げられます。学寮問題は全国的な問題で，学寮自体の位置付けが教育施設から福利厚生施設へと変化したことが大きいといえます。それに伴って，寮費が上がり，光熱費や水道料金も徴収されました。学生らは，学寮や学生会館は学生自身が自主的に管理運営すべきものだと主張しました。また医学部のストライキやがん研闘争などは，全体史でいかに取り上げるかは難しい問題と思います。大学自治をめぐる状況については，学生の側面からのみ捉えるのではなく，例えば学長選挙にどこまでの構成員が選挙権を有するか，あるいは，教室会議の問題なども考慮する必要があると思います。大学紛争時，大学構造委員会が設置されたことも重要だといえます。

★５０年史編纂室からのお願い★

５０年史編纂に関する情報・ご意見・アドバイスなどがありましたら，お気軽に同編纂室までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

部局史こんな話
薬学部編

山本　譲
名誉教授

平成8年3月，金沢で日本薬学会の116年会が開催され，1万余の会員が集まったが，その薬史部会の「北陸の薬史」と名付けられたセミナーで我が国で一番早く創設された金沢大学薬学部の歴史を述べる役を引き受けさせられた。齢の高い人々が殆ど亡くなっていた為だが，これが尾を引いて薬史学会への投稿（金大薬の歴史：新制大学に移行するまで）を依頼され，更に新制50年史の編纂に関係する迄に連なってきて驚いています。

私自身，今まで歴史への関心は特別深いわけではなかったのですが，学会誌への投稿の為，資料を何回も読み直していると学部の盛衰も一国の興亡と同じで，それだけの原因と理由があり，特に教授陣の責任が重いことに気付きました。正に「温故知新」と言うところでしょうが若い時に気付いておれば，もっと巧く学部運営が出来たかも知れないと過去の不勉強を悔やんだことを思い出します。

現在の歴史を書くのは支障のでる所があったり，評価の定まっていない事柄もあって，難しい点が多いのは事実ですが，一度活字になった文章は，それ自身で独り歩きするだけに，出来る限り史実に忠実，且つ公平に書きたいと思っており，永年お世話になった恩返しの気持ちで資料を集めている毎日です。

金沢の文化的な土壌を糧とし，地方的な悪い条件（人口濃度や石川県民の気風など）を逆手にとってユニークな大学を目指して欲しいと私自身考えていますが，編纂された新制50年史が単なる歴史の記録に留まることなく，21世紀における金沢大学の在り方を探求する出発点となり，また社会への貢献度を高める励みとなって，更に発展した大学に昇華されることを願って筆を進めるつもりです。

50年史編纂室 室員自己紹介

中川麻理子
MARIKO　NAKAGAWA

性格：のんびり屋
好きな言葉：明日は明日の風が吹く
趣味：映画・能楽鑑賞，本屋さんめぐり

この４月から50年史編纂室に勤務させていただいている文学研究科１年の院生です。日本史学を専攻しています。

私は地元出身ですが，金沢大学が創設されてから現在に至るまでの歴史は，ほとんど知りませんでした。だからこの仕事を通じて，新しい金大と金沢を知ることができ，とても勉強になります。

今は主に，このニューズレターのレイアウトなど編集を担当しています。右の「金大秘宝探検隊」のコーナーも担当しています。今後も続けたいと思いますので，情報・ご意見がありましたら，50年史編纂室の方へご連絡ください。

これからも，少しでも50年史編纂のお役に立てるよう，頑張りたいと思いますので，ご指導のほどよろしくお願いします。

金大秘宝探検隊

その壱
「キンストレーキ」
（医学部資料室所蔵）

一見，グロテスクなこのお方，実は，金沢に来てはや127年を迎えた，日本最古の人体模型の一人なのです。その名は「キンストレーキ」。身長170cmの男性です。パリの解剖学者Louis Thomas Jeroms Auzoux(1797~1880)の手により作られました。

彼は，藩命を受けて長崎に行った，卯辰山養生所の黒川良安先生と共に，明治二（1869）年，加賀藩へやって来ました。彼のお値段は，当時で800両。張子で作られたその身体は130の部分1700の細部分で構成されているそうです。

来藩以来，解剖学の講義・実習の際に使用され，補修を経て明治二十五・六年頃まで解剖学教育に多大な貢献をしました。

その後，解剖学実習に人体が用いられるようになり，今は医学部の資料室で，静かに医学生を見守っています。

金沢大学５０年 こんなお話 あんなお話

今回は，金沢大学名誉教授の木戸睦彦先生が昭和３６年８月から現在まで日々の出来事を記録しコメントされている大学ノート（全８冊）の中から，試験問題に関する興味深い記事を二つご紹介します。前者は昭和４２年１０月２日付けのもので，後者は昭和４９年３月９日付けのものです。

◆その１

先生「諸君が真面目に私の講義を聴いても分らなかったら，それは諸君が悪いのではない。私自身が分っていないのだ。」

生徒「そうだ！」

先生「同様に私が一生懸命諸君の答案を読んでも分らなかったら，それは諸君の方が分っていないのだろうと思われるから，０点をつけることにしている。」

生徒「…」

◆その２

入学試験の化学にニトロベンゼンの用途を問う問題を出したところ「模型飛行機の燃料」という答があった。採点者は誰も模型飛行機の燃料を知らないので困った。そこで一人の先生が模型飛行機を売っている店に電話をかけて訊いたところ，模型飛行機の燃料は松根油とニトロベンゼンを混ぜたもので受験生の解答は合っていた。しかし，混合の割合は飛行機によって違うので，「どんな飛行機でしょうか」と模型飛行機屋にきかれた先生は困って，むにゃむにゃとごまかしたそうである。

次に，元金沢大学職員の大橋秀二さん（厚生課長で退官）が在職中の昭和34年頃から退職される昭和54年までの間に仕事の状況などを記された大学ノート（全16冊）の中から，昭和43年２月５日付けの第４回補佐会議提出議題の一端について，ご紹介します。ここからも，各課の連絡・調整を計る補佐会議の役割の重要性が垣間みえます。

◆補佐会議記録の上申方について

補佐会議で議論された事項について，課へ帰って課長や係長に報告しているが，中には部長に上申しなければならないような事項もある。このような場合，課長から上申するのか。場合によっては，補佐から細かい点まで説明を要することもあると思う。議事録が部長に届けられてあるのか。庶務部長から各部長に論議された事項を話して置いて貰えると話が通じ易いと思う。

50年史編纂委員会　委員から

鳥山喜一氏のこと

５０年史編纂委員会委員
古畑　徹
（文学部助教授）

私の本来の専門は７世紀から１０世紀の東アジア史，とりわけこの時期に中国東北地方・北朝鮮北部・ロシア沿海地方一帯に栄えた渤海の歴史である。そんな専門外の人物が何で５０年史編纂室の常勤室員でいるのか，と不思議に思われる読者の方も多いと思う。私自身，橋本室長からこの話が来たとき，何で私が，という気がしたし，正直今でもその思いは残っている。それでも引き受けたのにはいくつかの理由があったのだが，その一つに鳥山喜一氏についてこれをきっかけに少しは新しいことが分かるのではないか，という思いがあった。

鳥山喜一（1887-1959）の名をご存じの方はほとんどおられまい。鳥山氏は私が専門とする渤海史のパイオニアで，戦前はソウルの京城帝国大学教授として東洋史を講ぜられながら「満州」の多く発掘調査に携わり，「満朝史」研究をリードされた人物である。一般向け中国通史として戦前・戦後を通じてロングセラーとなった『黄河の水』の著者でもある。戦後は引揚げ直後から３年ほど金沢に住まわれた。金沢における経歴を『渤海史上の諸問題』（風間書房，1968）所収の略年譜から抜粋すると，以下の通りである。

昭和21年5月31日　任文部教官叙一級　補第４高等学校長
昭和21年6月8日　信越北陸地区学校集団高等学校部会副部長を嘱託せらる。
昭和22年1月15日　連合軍総司令部より現官職に留任承諾せらる。
昭和23年12月23日　昭和22年勅令第１号公職審査に合格
昭和24年5月31日　金沢大学法文学部長兼第四高等学校長に補され，金沢大学長事務取扱を命ぜられる。
昭和24年6月10日　願により金沢大学長事務取扱を免ぜらる。
昭和24年7月16日　富山大学長に補せらる。

要するに，本学発足期の学校側の責任者なのである。本学発足期の状況を明らかにする過程で，鳥山氏の学問を考える上での新資料がでてはこないかという期待を私が持ったのもあながちおかしなことではなかろう。

今のところ，この期待に沿う資料にはお目にかかっていない（まだろくに編纂事業に携わっていないのだから当然だが）が，四高教授に満州・朝鮮からの引揚者が多かったという話は伺った。今は鳥山氏だけでなく，より広い視点で満州・朝鮮の植民地知識人と四高・金沢大学との関係が発見できる可能性にも期待している。なお，鳥山氏の写真は，香林坊・石川県近代文学館２階の四高資料室に，最後から二人目の校長として飾られている。

50年史編纂室　日誌抄録　（平成9年４月～平成９年６月）

年月日	内　容
9.4.7	編集専門委員会（第３回）開催
4.21	医学部所蔵資料の確認（第２回）
4.25	編集専門委員会（第４回）開催
4.30	医学部所蔵資料の確認（第３回）
5.12	事務通報（コピー）の製本完了
5.23	編集専門委員会（第５回）開催
5.27	新制大学設立時資料（コピー）の製本完了
5.30	健寿会総会においてPR
6.5	「昭和廿二年以降北陸総合大学設立関係書類」の整理着手
6.5	金沢大学設置後の協議会議事録の整理着手
6.13	部局史編集委員会（第２回）開催

５０年史編纂室：本部棟６階　☎０７６（２６４）５２８４・５２８８
錐０７６（２３４）４０１３